

『湯の味』

長尾優作

9,934文字

【あらすじ】

長きに渡り、古びた銭湯を守り続けてきた湯本吉蔵は傘寿を迎え、体を心配した息子夫婦に閉店を勧められるが断固拒否。亡き妻との約束を守る為、掃除を欠かさず風呂屋を続けたが、ある時から物忘れが多くなり医師から認知症だと告げられる。大切な思い出を忘れたくないと奮闘するが……。

風鈴の音に癒されながら、香り良い煎茶を一口啜った。

「ああ……美味しい」

二人で長椅子に座り、風呂を眺めた。

「なあ、紀子さん」

「はい」

「一緒に、この場所で過ごさないか。私は君と共に、この風呂屋を守っていきたい」

彼女は着物を整え、体をこちらへ向けた。艶のある黒髪、整った小顔、楚々とした雰囲気の女性は、透き通った目で微笑んでくれた。

チリン、チリン……

残暑が続く八月の終わり。客足は遠のき、暇ができた。

あいた時間で風呂中を掃除する。番台、硝子戸、タイルの床に大きな湯船。中央にある富士の絵は数少ない絵師が描いたものだ。

父・湯本茂から受け継ぎ、私で二代目。聖蹟桜ヶ丘にある古びた銭湯だ。

私が生まれたのは岡山だが、親の仕事関係で四国、関西を巡る幼少期。

行きつく果ての東京で父が全財産をなげうって建てたのが、この銭湯というわけだ。古色蒼然たる佇まいとでも言おうか……瓦屋根は欠け、外壁は所々剥がれ落ち、『心の湯』と書かれた暖簾(のれん)も色褪せている。

地元の住民や心が疲れた人々が休めるようにと建てた憩いの場。

頑固一徹な父の教え通り、朝昼晩、毎日風呂を磨くのが、私の生き甲斐である。

「今日も、ありがとう」

私は隣の一軒家に住む友人宅へ行った。

「おーい、三瓶。おるんか？」

長年の将棋仲間、加藤三瓶とは三十数年の仲である。毎月欠かさず一局、将棋を指すのが唯一の楽しみだ。ドア横の表札には加藤三瓶、博文、奈津美、春馬、陽夏、秋彦、冬輝、ペットの『ポチ』とある。三瓶の家は親戚も多く大家族だ。いつも賑わい楽しそうな声が聞こえてくる。(ポチは少々やかましい)

今と違い、大正・昭和初期はどの家も兄弟が多く、笑い声や怒鳴り声が外まで響いたものだ。近所の者は皆、家族同然、顔見知りだった。

私の兄弟は六人。頑固な父・茂とお淑やかな母・フミ。

長男・幸雄、長女・晶子に続き、昭二、幸子、吉蔵、末和。残されたのは私と末和。末和はたまに電話をしてくるが、足腰が悪く、今はもう会う機会はない。

「おーい、きちぞう。こっちから入れ」

庭から三瓶の声が聞こえ、軒下に回る。彼は将棋と睨み合っていた。

「三瓶。団子持って来たぞい。食べようや」

「いいね、俺の好物だ。今、茶頼むわ。おーい、奈津美！ 吉蔵来たぞ！」

台所から「はーい」と声がする。草履を脱いで上がり、三瓶の前に座る。

「今日は風呂休みか？」

「いいや、夕方から開けるんじゃ」

「にしても、吉蔵。もう体が厳しいだろ。どうだ、俺と一緒に隠居生活送るのは？」

「阿呆か、団子みたいな頭した爺さんと暮らしたないわ」

「おう、じゃあ食ってみろ、俺の頭はしょっぱくて美味いぞ？」

二人でゲラゲラ笑いながら団子を全部たいらげた。三瓶の娘である奈津美さんがお茶を持ってくる。「いい歳して何はしゃいでるのよ。はい、どうぞ」

「こりゃどうも」

「あ、そうそう、吉蔵さん。明日、和也さんと香織さん帰ってくるんでしょう？」

「……はて？」

「昨日、香織さんから電話あったのよ。吉蔵さんが一人で心配だって」

「余計なお世話じゃ言うてくれ。うちの馬鹿息子の方が心配じゃ」

息子夫婦は、孫の遥と三人で立川市に暮らし、月に何度か銭湯を手伝いに来てくれる。和也は風呂屋を継がずに、金がいいからと不動産の仕事を選んだ。老朽化した銭湯を建て替える金を出すと言ってくれたが、私は断った。

あいつは金で何でも解決できると思っている。それが気に食わなかった。

「お、そやそや、今日は美味しい団子持って来たんじゃ。後で皆で……あれ？」

探したが持って来た団子が見当たらない。

「おい、吉蔵。何言ってるんだ。さっき俺らで食っただろうが」

目の前に食べカスがあった。

「ああ……そやったか。すまん、食べてしもうたわ」

彼女は笑い、別の茶菓子を取りに行った。

「やっほ、じいちゃん！」

可愛らしい顔がひょこんと出る。孫の遥だった。

「おう、遥。来たんか」私は番台に座り、今日の精算をしていた。

「じいちゃん手伝って言われたから来ちゃった」

「そうか、すまん。どれ、茶でも淹れようか……」

「え、いいよ。今日は掃除しに来ただけだから」

遥は物置から雑巾とワックスのセットを持って、床を磨き始めた。子供の時から慣れ親しんだ銭湯は、彼女にとって第二の家だった。

「ああ、そうじゃない。部屋の奥から磨くんじゃ。ワックスが乾く前にお前の足跡が付くじゃろう」

「あ、そっか。はい」

「木目に沿ってゆっくり拭くんじゃ。急いでやったら床が怒るわ」

「床が怒るの？ 何それ、変なのー」笑いながら風呂中を磨いてくれた。若いのによくやってくれる。番台に飾ってある写真の埃を払った。若き日の私と紀子だ。

掃除が終わり、遥を呼んだ。

「助かったわ。ほれ小遣いじゃ」

「えー、いらないよ。夏休みの間だけ違うバイト始めたし」

遠慮していたが、強引に小遣いを渡した。

「仕事もええけど勉強はしとるんか？ どこだか留学するとか香織さん言うてたけど、ほんまか？」

「留学？ しないよ、今まだ大学二年だし、友達と遊ぶ方が楽しいもん」

「学校は遊ぶ場やないぞ。わしが子供の頃は、勉強しとうてもな……」

「あー、はいはい。昭和の話は何度も聞きました。ね、汗かいたからお風呂入ってもいい？」

「ああ、構わんよ。向こうのタオル使っとくれ」

遥は鼻歌を響かせながら客のいない風呂にゆっくりと浸かり、遊びに出かけた。

夕方から夜にかけて客は数える程度、常連の年配と親子連れだ。

時たま、部活動を終えた学生が団体で来場する。その時は大忙しだ。やれタオルがない、帽子を忘れた、終いには壁をよじ登り、女湯を覗こうとする不届き者もいた。こればかりは昭和も平成も変わらない。明治の頃の湯屋は混浴だったと聞く。江戸時代では客に湯茶のサービスをする湯女(ゆな)という美女がいたそう。民衆にとって湯屋は娯楽のひとつだったのだろう。

だが、時代と共に自家風呂が増え、銭湯を利用する人が減ったのである。時代の流れは時に、酷な選択を我々に与えていく。

昔からの習慣なのか、日本人は場を清潔に使うことを心がけている。客は皆使い終わった椅子を水で洗い流し、黄色い洗面器を裏返して揃え、次の人へ軽く一礼をする。日本人は真面目で礼儀正しい人種だなどと改めて感じる。知らぬ相手に一礼するなど、体に馴染んでいなければできないことだ。

幼い頃から通う者たちは、ここで何かを学ぶこともあるだろう。

夜の掃除を終え、奥の母屋で一杯やっていると、息子夫婦がやってきた。

「今日な、遥が手伝いに来てくれたわ」

「あら、良かったわね。電話で頼んでおいたのよ」

香織さんは持ってきた肉じゃがを皿に盛りながら、近くにできた老人ホームの話をした。和也は缶ビールを手に畳に座り、話を切り出した。

「来月で八十だな、親父」

ビールをぐいと飲み干す。何か言いたそうな顔だ。

「正直……もうキツいだろ。さっき向こう見て来たけどさ、やっぱあの風呂、限界だと思ふよ」

「な、何を言うとする……どこが限界なんじゃ」

「見りゃあわかるだろ。俺仕事でやってるからわかるの。柱も古くて腐ってるし、誰が見ても潰れそうだって思ふよ。建て直さないんだったら店を閉めた方がいい」

その言い方にカチンときた。

「ば、馬鹿もん、何が潰れるだ……そんなわけあるか！ わしは閉めんぞ！」

息子も負けじと言い返すが、お互い平行線を辿るようなものだった。

香織さんが止めに入り、二人は帰って行った。

何を言うかと思ったら、店を閉めろだと……？ そんな馬鹿げた話があるか。

翌日。朝から風呂を掃除した。錆びた鏡、色が剥げた壁と床など洗剤を使って磨いていく。最後に、段差がある高めの湯船の縁に登り、壁を拭き始めたが、おもむろに手を止めた。

——あれ？ ここは、拭いたか……？

頭がぼんやりする。湯の煙が顔を覆う。手を振り、煙を払おうとした。

刹那——、足が滑りバランスを崩して体がぐらりと横へ倒れた。

……バツシャーン！

湯の中へ落ち、衝撃で脳が震えた。深く深く、地の底まで沈んでいくような……

いっしょに……あなたと……

——ガタンッ！

「じいちゃん！」

突然、声が聞こえ、私は水中で目を開け、ごぼっと息を吐いた。

く、苦しい……誰か……

ザブンと音がし、体が細い腕で包まれ、引っ張られた。水を含んだ服は重く、意識が朦朧とし、動けず身を任せるしかなかった。「ぷはっ！」ぜえ、はあ、と息を吸う。

声が出ない。耳もなぜか聞こえにくい。焦点が定まらないが、女性の姿が見える。

「は……はるか……」

無機質な天井……病院のベッドの上

誰もいない……薄暗い……体が震える……怖くて目を閉じた

*

「五十に嵐と書いて『いがらし』と申します。どうぞよろしく」

白衣の名札に『五十嵐 遼』と見えた。

味気ない朝食をとっていると息子夫婦が現れ、車椅子に乗せられて、この殺風景な診察室に呼ばれると、唐突にあることを告げられた。

「おそらく、アルツハイマー型認知症だと思います」眼鏡をかけた医師は言った。

——アルツ……認知症？

「認知症……とは、あれか、痴呆症か……？」

「はい。人間の海馬の部分は、病変が起こると記憶ができなくなるんです。湯本さんの脳の中で、特殊なたんぱく質が溜まって、神経細胞が壊れて減っていくと、認知機能に障害が起こるんです。今後、もしかしたら記憶障害や見当識障害などの症状が——」

何を言っているのか、さっぱりだった。この医者は何語を喋っている。

横にいた和也が不安げな表情で医師に相談する。

「倒れたのが原因ですか？」

「いえ、足首は捻挫していますが、頭部の傷は見られませんでした。お風呂の中に倒れたのが不幸中の幸いでしょう。脳の異変はおそらく数年前から発症していて、

例えば物忘れとか——」

医師の話はまったく耳に入ってこなかった。

……記憶障害とは何だ。

「ところで湯本さん。ひとつお聞きしたいんですが、私の苗字ってわかります？」

「……何を、言うとするんですか。今さっき……」

医師は胸元の名札をさりげなく隠した。

「あのう……あれですわ。えーなんじゃったかな。覚えとるんよ……」

医師は何かを書き込む。

「すみません、難しい名前です。五十に嵐で、五十嵐です。どうぞよろしく」

熱があったので数日間、入院することになった。

今は九月だと看護師は言った。息子夫婦が大部屋を訪ねてきた。

「親父、調子はどう？」

「風呂は大丈夫か……？ お前が番台やってくれとんのか？」

息子は「心配するな」と言う。

「ご飯は食べました？ お医者さんの言うこと聞いて下さいね」

着替えを棚に入れながら香織さんが言う。彼女は平日介護のパートをやっているせいか仕事口調の時がある。

「お義父さん。この間の話、どうです？」

首を傾げた。

「知り合いがやってる老人ホーム、来月までに予約すれば来年春には入れるかもって。どこも何年待ちとかで、中々入れないのよ。今度、一緒に見学行ってみませんか？」

「香織の職場のツテで入れるんだから最高じゃないか」

「別に入居しなくてもいいのよ。お昼の間だけ遊びに行ったりもできるんだから」

「阿呆か……風呂はどうするんじゃ」

息子は溜息をつく。

「なあ、みんな親父の為を思って……」

「わしは、やめんからな」

「そんな体じゃ無理だよ。また怪我するし、何か忘れて銭湯が火事にでもなったら大変だろ」

「何がわかる……お前にわかるか、わしの気持ちがあっ！」

胸が、張り裂けそうだ。

「このままやとな、銭湯で過ごした日々が……大切な思い出が無くなるんじゃ！」

声を振り絞った。室内が騒然とする。息子はそれ以上何も言わなかった。

終わりたくはない。あの場所は、私の人生なんだ。

数日後。午後になり退院の時がやってきた。

トイレを済ますと、廊下で掃除をしている年配の女性を見かけた。

「どうも、ご苦労様です」

挨拶すると女性は気付き、会釈した。

「こんな大きな施設、大変ですなあ」

「でも、これが私の生き甲斐なんですよ。何年も掃除してますとね、この病院が我が子のように見えてくるんです。ああ、また汚して……って」

汚れたトイレや廊下をひたすら磨く。医者や看護師も偉大な職業だが、ここにも素晴らしい仕事をしている人物がいるのだ。

感謝の意を込めて、購買所で買ったドロップ飴を渡した。

「疲れた時に食べて下さい。糖分をとると、当分は仕事があかどりますよ」

「あらー、お上手」彼女は礼を言った。

息子夫婦を待たずにメモ書きを受付に渡すと、一人車椅子に乗り、病院を出た。

一刻も早く、銭湯に戻りたかった。

歩いても帰れる距離だった。横断歩道を渡り、坂道を上る。

少し遠回りしてあの場所へ行こうと考えた。

「なんじゃ、こんな道……」

いつも歩いていた道が車椅子だと想像以上に難しい。これに乗る人々の苦労を身に染みて感じた。誰の手も借りずに上り切ると公園の奥に丘が見えた。

『ゆうひの丘』——昔、紀子と来た思い出の場所。

丘の上で息を整え、騒々しい町並みを見下ろした。

昔はこれほど眩しくなかった。自然が多く、もっと穏やかで静謐な世の中だった。

目を閉じると、優しい風が頬を撫でてくれた。

——私は、間違っているのだろうか。

親父から受け継いだ銭湯を閉めるということは、私の人生に幕を下ろすということ。だが、あの時、妻と約束をした。

『私は君と共に、この風呂屋を守っていきたい』

それから二人で手を取り合い、以心伝心、小さな銭湯と共に暮らしてきた。

妻は亡くなる前日。「一緒に守ることができなくて、ごめんなさい」と謝った。

それから私は、妻の為に銭湯を守り抜こうと誓ったのだ。

……なあ、紀子。君はどう思う。続けた方がいいと言うだろうか。それとも——

「じいちゃん？」

振り返るとリュックを背負った遥がいた。

「何してるの？」

「今日退院したんじゃ。学校の帰りか？」

「ううん、バイト。一回帰って、友達とご飯食べに行くの」

「そうか……」

「……大丈夫？」

落ち込んだ顔を孫に見られたくはなかった。

「どれ……帰ろうか」遥は後ろに回り、車椅子を押してくれた。

「ねえ、じいちゃん。来週日曜のお昼、あけておいてね」

「何かあるんか？」

「へへ……秘密」

「秘密か、なんじゃそれは、はっはっは」

遥の笑顔を見ると、気持ちが楽になる。いつの間にか気分がすっきりとしていた。

先日、息子らに強く言ってしまったことを後悔していた。帰ったら謝ろうと思う。

あの二人も真剣に私のことを考えてくれたのだ。意地を張る必要はどこにもない。

「そうじゃ、遥。あのときは、助けてくれてありがとうな」

「そうだよ、ビックリしたよ！ 次から気を付けて掃除してね、私も手伝うからさ」

「すまんかったな……よっしゃ、もっと押しとくれ」

「えー、大丈夫？ じゃあ、行くよ？」

車椅子は前に進み、徐々にスピードを上げた。

「やっほーう！」

遥は可愛い声を出して笑った。清々しい風に包まれ、爽快な気分だった。

「は一はっは！ こりゃあ気持ちがいいのう！」

丘を過ぎ去り、緑に囲まれた広い道を通る。

風が靡き、木の葉が空を優雅に舞う。心地のよい風を感じ、両手を広げた。
無数の葉がスローモーションのようにゆっくりと落ち、歓喜の舞を見せてくれた。
暖かい日差しを浴びながら、見慣れた煙突を目指した。

銭湯に戻り、風呂と相談をした。傍から見たら爺の独り言である。
——このまま頑張ってるか。それとも、一緒に休もうか。
時折、パキッと音が響く。木が伸びた音……いや、会話をしたいのだ。
静寂の中、耳をそばだてた。

「……そうか、わかった。お前が言うなら……そうしよう」
番台にある写真を一瞥する。妻はにっこりと微笑んでいた。

一緒に守ることができなくて、ごめんなさい
あなたとここで暮らせて、本当に幸せだった——

夜になり、息子夫婦が慌てて帰宅し、私の顔を見て安堵の表情を浮かべた。一人で勝手に帰るなど叱られた。反省し、これまでのことを謝った。そして、ひとつ重大な決断をしたと伝えた。

「——ここを閉めようと思う」

苦渋の決断だったが、息子の言う通り、風呂場はもう限界を迎えていた。
風呂が私に「一緒に休もう」と言ってくれた。私にはわかる、心に届いたのだ。
これ以上続ければ、負担が重くのしかかるだけだ。辛い思いはさせたくない。
「十分、頑張った」訥々と語る私を見て、二人は納得した。一週間後に店の幕を下ろすと決め、親父に線香をあげて報告した。「仕方がない」と天国で言ってくれることを願う。その夜は、和也と共に香織さんの美味しい手料理を食べた。

私はやっと気付いたのだ。長年続いた銭湯が終わろうが、何も恐れることはない。

私には、支えてくれる家族がいる——。

「八十歳おめでとーう！」

パンパンとクラッカーの音が鳴る。ケーキを埋め尽くす蝋燭の火を吹き消した。
あれから、一週間後。
三瓶に呼ばれ、自宅へ行ってみると、皆が集まり、私の誕生日会を開いてくれた。

遥が秘密にしていたのは、このことだった。

「さ、食べましょう」と奈津美さんが言うと、子供たちが豪華な食べ物に手を伸ばす。

奈津美さんと香織さんは毎度の世間話。和也と博文さんは酒のつまみに仕事の話で盛り上がる。遥と三瓶の孫たちも食事を終わるとテレビゲームで盛り上がった。

三瓶が二つのグラスに焼酎を溢れるほど注ぎ、乾杯した。

「ちょっと飲みすぎないでよ」と女性陣の声。

「うるさいわ」爺二人は一蹴する。

幸せな時間だった。温かい家族と友人に囲まれ、私は恵まれていると感じた。

「何か抱負は無いのか」と三瓶が煽る。全員、私の言葉に注目した。

軽く咳をし、前へ出て想いを伝えた。

「こんな老いぼれ爺さんの為に、素晴らしい会を開いてくれてありがとう。わしと三瓶は入れ歯じゃから、固い肉はよう食べれんかったわ」

皆がははは、と笑った。

「知っとると思うが……歳のせいかわつたぼくなつてしもうて、風呂屋を続けるんが難しくなつた。だが、こうやって今日、私の誕生日に銭湯が最後の日を迎えられるのも、ここにいる皆のおかげじゃ。大切な家族に礼を言う。ありがとう」

和也と香織は微笑んでいる。

「そして……忘れてはいけんのが、孫の遥じゃ」

遥の顔を見る。

「今回、湯本家を代表して孫の遥が掃除を手伝ってくれた。先週も家へ帰る時、遥が車椅子を押してくれたんじゃ……ほんま嬉しかったわ。ありがとうな、遥」

遥は、きょんとした目で私を見る。他の全員も急に黙り込んだ。

「お義父さん……」香織さんは呟くと、隣にいた和也を見た。

「な、何言つてんだよ、親父」

和也が戸惑っている。子供らも困惑した様子だった。

「何つて……お前。一言、礼を言つたのがいけんのか」少し感情的になった。

「みんな、ごめんなさいね……」香織さんが謝りながら私の元へ来る。

——なぜ、謝る。何か悪いことでも言つたか？

「おい、香織さん。わしは間違つたこと言つたかのう？」

「いいの……気にしないで、お義父さんはただ……」

すると、三瓶の声がした。

「おい、吉蔵。酔っぱらつてんじゃないのか？ よく見てみろ」

三瓶が人差し指を『遙』に向けた。
「あいつは、お前の孫じゃない。俺の孫だ」

——え？

全員、困った顔をしていた。
おまえの……じゃない……って……どういう、ことだ

一瞬、思考が停止した。

私は固まり、眉根を寄せた。香織さんが肩を撫でながら小声で囁く。
「お義父さん、あの子は遙じゃないの。加藤さん家の陽夏(はるか)ちゃんよ」
はるか……？ 加藤陽夏——？
……嘘だ……そんな馬鹿な……
「遙は去年から海外に留学してるって言ったじゃないですか。大学四年生の最後だからって」

そう、だったか……？
あ……頭が痛い……混乱する……記憶が……私の記憶が、滅茶苦茶だ——
「あ、あーら……そうよね、間違っちゃうわよね」

突然、奈津美さんが声を出す。
「私もね、子供四人もいるから、たまに誰だかわからなくなっちゃって困るのよ。名前間違うなんてしょっちゅうよね、みんな？ ごめんなさいね、吉蔵さん。湯本さん家のお孫さんも『はるかちゃん』で、同じ名前だもんね。間違っても仕方ないわよ」

苦笑いしながら口早に言う。
私は奥にいる彼女を見た途端——、急に息が荒くなった。

「お義父さん、大丈夫？」
「……そうじゃ、ちょっと最後に……風呂見てくる」
狼狽し、逃げるようにその場を去った。

ガシャン！ と硝子戸を閉め、誰もいない風呂場に入る。荒い息が反響する。
「ああ、なんや……どうしたんじゃ！」
まちがった……人を間違えてしまったのか？

冷水で顔をびしょんと洗う。

今まで、手伝ってくれたのは、隣の家の子だったのか？

どうしたんだ、私は……孫の顔を見間違ふなんて……そんな、はずは——
すると、戸が開き、誰かが入ってきた。振り返ると『彼女』がいた。

「遥……いや、陽夏か……」

「じいちゃん……大丈夫？」

「ああ……すまん。せっかくのお祝いに、変なこと言うてしもうた……」

彼女はハンカチを差し出した。それを借り、顔を拭いた。

「ごめんなあ……わしはてつきり、孫の遥やと思っとった……本当にごめんなあ」

「謝らないでいいよ。だって私たち兄妹みんな小さい時から、ここのお風呂入りに来てたんだよ。家族みたいなもんだと思ってた」

——家族。

私はハンカチを丁寧に畳みながら心を落ち着かせた。

「だからね……さっきは吉蔵じいちゃんの孫だって言ってもらえて嬉しかったよ。全然、謝ることなんてないんだからね」

今は、その表情がはっきりとわかる。

髪も口も体型も似ているが、その子は遥ではなかった。

「今日でおしまいだね」

「ああ……もう、終わりにせんといかんのう……」

ぼた……ぼた……

不覚にも涙が零れた。

「……いかん、いかん。なんじゃ、おかしいな……」

終わってしまうという現実、そして彼女の優しさに、つい心が緩んでしまった。

「……にしても、ようここまで潰れんでくれたわ。台風や地震があっても倒れんかったんよ……ようやってくれた。本当にありがとうなあ……」

そっと風呂に触れる。我が子を撫でるように——

年老いたのか、それとも毎日磨いたせいなのか私の手は皺々になっていた。

「……のう、陽夏。最後にひとつ憶えといてくれんか」

彼女は透き通った目で私を見た。
「ここに、小さな風呂屋があったことを憶えといてくれんかのう」
声が震えた。心から出た言葉だった。
「わしからの最後の願いじゃ……。何が怖いてなあ……。ここでの思い出を忘れるんが一番怖いよ。ここは、わしの人生そのものなんじゃ」
父から受け継いだ宝物。この場所だけは忘れたくない——。
「忘れないよ、私がみんなに伝えるから。掃除の仕方だって忘れてないし。えっと…
…木目に沿って拭くんだよね」
「ああ……。そうじゃ」
「もしも、じいちゃんが何か忘れちゃったら、私が思い出してあげる。じいちゃんが出会った人とか大切にしていた物、全部教えてあげるから心配しないでいいからね。怖い物なんて、なーんにもないよ」
彼女の言葉が心に響く。
「今まで、お風呂を守ってくれてありがとうございます」
私は目を潤ませた。
「……。ありがとう……。ありがとうな」

夕焼けの淡い残光が、老いた影を地面に映し出す。
彼女に支えられ、外に出た。そっと暖簾を外し、銭湯を見上げる。昭和の時代から人々の心と体を癒し続けた『心の湯』悠久の時を流れ——今、静かに幕を閉じる。
そこへ息子夫婦、加藤家の皆がやってきた。私を囲み、優しい言葉をかけてくれた。三瓶が手を強く握り、「いつまでも友達だ」と何度も繰り返していた。
息子から事情を聞いたのだろう、良き友を持った。
陽夏が色紙に綴った寄せ書きをくれた。私に内緒で作ったそうだ。お祝いの言葉をじっくりと眺める。
すると、香織さんが携帯のテレビ電話を見せてきた。孫の遙からだった。元気な声で八十歳を祝い、長年ご苦労様でしたと祝福の言葉をもらった。

紀子、聞こえるか。私たちは、ここを守り切ったんだ——。
「親父、後ろ」と和也が言う。
噂を聞きつけたのか、近所の住民や常連客が銭湯の前に集まってきた。

それを見て、酒で勢い付いたのか三瓶が声を張った。
「よっ、湯本吉蔵！ 長い間、お疲れ様でした！」
三瓶は手を叩き始めた。それに続き、他の人々もパチパチと手を叩く。

——拍手喝采。

その光景に私は胸を打たれた。
拍手が鳴り止むことはない。暖簾と寄せ書きを大事に抱え、ぎゅっと口を真一文
字に結び、深々と頭を下げた。人々の眼差しが湯のように温かかった。頭を上げ、
応援してくれた人々の顔を眺めていく。見た顔ばかりだ。
最後に、彼女と目が合った。見つめると、満面の笑みを浮かべてくれた。
その瞳が薄らと濡れていたのを私は忘れないだろう。
廃れた煙突から最後の湯煙が立ち昇る。
穏やかに空高く舞い上がり、移り行く町並みを見渡しているようだった。
いつまでも空を漂い、湯屋との別れを名残惜しむように——。

(了)